

大学生の家庭科「住」分野とインテリアに対する意識

澤 島 智 明

University Student's Attitude to Housing Field of Home Economics Education and Interior Coordination

Tomoaki SAWASHIMA

要 旨

本研究は大学生を対象として、彼らが小学校～高等学校で受けてきた家庭科教育の「住」分野に対する評価、インテリアへの興味、実際の部屋作りの現状などを把握し、その関連性を見ることにより、家庭科教育で「インテリア」に関する知識を学ぶことの意義を考察することを目的とする。教員養成系学部の学生を対象に家庭科「住」分野、「インテリア」学習、自室の部屋作りに関するアンケート調査を行った結果より、次の知見を得た。1) 大学生の「インテリア」への関心の高さや「インテリア」学習への肯定的態度から考えて、高等学校までの家庭科教育で「インテリア」を取り上げることが、生徒の住分野への興味を喚起する可能性が高い。2) 多くの大学生が問題を抱えている事項、例えば「収納」に関する技術的内容を取り入れることで、住分野の学習内容が実生活に直結する、より実践的なものになることが期待できる。3) 多くの大学生が「インテリア」学習を肯定しながらも家庭科教育に必須ではないと考える一因として、部屋作りには「お金」や「センス」という学習では獲得できないものが重要であり、「知識」を身に付けても役に立たないという誤認があると思われる。家庭科教育で「インテリア」を取り扱うことの最も重要な意義はそのような認識を変え、身の回りの環境に積極的に関与するきっかけを与えることであると考えられる。

1. はじめに

近年、安価で手頃なインテリアのトータルコーディネートを提供する家具販売業者が売上げを伸ばしており、不景気の中比較的安定した成長を続けている。また、インテリア関連書籍も多数出版されており、かつての主流であった主婦層向けのものから、近年は中高年齢層向け、男性向け、若年層向けと多様化しており、様々な層でインテリアや部屋作りに対する関心が高まっていることが窺える。このような中、親元から離れて初めての一人暮らしの機会を得る者も多い大学生の部屋作りへの関心も、同様に高まっている事が予想される。

大学入学までの若年層がインテリアや部屋作りの知識や技能を獲得する機会としては学校の家庭科教育における「住」分野の役割が期待される。しかし、家庭科「住」分野については、扱いにくい分野である、苦手意識を持つ教師が多い、生徒の関心が低い等の問題がしばしば指摘されている。理由として、学習内容が実生活にすぐに生かされにくい分野であること、教材が少ないうえにすぐに陳腐化すること、教員養成系大学での住居関連の授業が少なく、教える側に学習経験や知識が少ないこと、個人の住宅事情に差が大きくプライバシーの問題があることなどが挙げられている^{1)～4)}。

このような家庭科「住」分野の問題点、特に実生活に生かされにくい、生徒の関心が低いという点を改善する一つの方向性として、部屋作りや「インテリア」に関する学習によって生徒の興味を喚起

することが考えられる。中高生ともなれば個室を与えられている生徒が多く、自室の部屋作りは比較的身近な問題であるし、近い将来に一人暮らしを始めるのであれば、部屋作りはさらに実際的な問題となろう。

家庭科「住」分野の学習内容を検討した既往研究では「インテリア」学習について興味深い指摘がされている。宮崎ら⁵⁾は大学生を対象としたアンケート調査を行い、大学生の多くが、住居学習は面白くないが生きる上で役に立つものと捉えていること、「インテリア」「収納」は学ぶ意欲は高いが教育的必要性は低い「実用的・付加的」なテーマであると捉えていることを報告している。また、湯川ら^{6) 7)}は高校生と家庭科教員を対象にアンケート調査を行い、高校生の住居領域を学ぶことについての関心が低いこと、「インテリアデザイン」は生徒の最も高い関心が示されたが、教師側が教える必要があると考える割合は低いことを指摘している。また、立松ら⁸⁾は湯川らの調査の7年後に同様の調査を行っているが、ここでも「インテリア」は「家族・プライバシー」と共に生徒と教師の関心の隔たりが大きい分野であることが報告されている。このように既往研究では家庭科「住」分野における「インテリア」学習がその必要性を認められているとは言い難いことが示されている。一方、既往研究では「インテリア」学習に絞った詳細な調査・分析は行われておらず、「インテリア」学習の必要性が認められにくい理由やその背景にある若年層の部屋作りの実態との関係は不明である。

本研究は大学生を対象として、彼らが小学校～高等学校で受けてきた家庭科「住」分野に対する評価、インテリアへの興味、実際の部屋作りの現状などを把握し、その関連性を見ることにより、家庭科教育で「インテリア」に関する知識を学ぶことの意義を考察する。

2. 調査概要

佐賀大学部文化教育学部の学生を対象に授業時間を利用してアンケート調査を行った。期間は2010年の7月中旬から下旬。アンケートは選択式で授業の終了前15分程度の時間を使い、配布、記入、回収を行った。アンケート設問の概要を表1に示す。

表1 アンケートの質問項目

<p>1) 小学校～高等学校の家庭科学習、および「インテリア」学習について</p> <ul style="list-style-type: none">・「衣」「食」「住」「家庭生活と家族」の「楽しさ」「有用性」順位・家庭科「住生活」分野の好き嫌い・「インテリア」の好き嫌い・家庭科教育に「インテリア」学習を取り入れることの賛否、及びその理由・取り入れた際に学んでみたい内容 <p>2) 自室の部屋作りについて</p> <ul style="list-style-type: none">・部屋作りの「こだわり」・欲しい家具、必要な家具・部屋作りにおける悩み、やってみたいこと・部屋作りの満足度・部屋作りに必要なもの・知識・センスの取得方法

3. 結果・考察

授業時間中に配布・回収を行ったためアンケートの回収率は100%であり、回答者のほとんどが文化教育学部の学生であった。有効票は229票。回答者の属性は次の通りである。

性別構成・・・男性：71人（31%）女性：157人（69%）

学部構成・・・文化教育学部：225人（98％） その他：4人（2％）

学年構成・・・1年生：30人（13％） 2年生：59人（26％） 3年生：121人（53％）
4年生：19人（8％）

居住形態の構成・・・自宅生：88人（39％）（うち自室所持83人（96％））
下宿生：138人（61％）

(1) 大学生の家庭科「住」分野に対する意識

図1、図2は学生が小学校から高等学校まで受けてきた家庭科教育の内容に関して「楽しさ」と「有用性」の点から分野の順位付けを行ったものである。「楽しさ」「有用性」とともに「食」分野の評価が高く、続いて「衣」分野となっている。「住」分野は「家庭生活」分野と共に評価が低い。「有用性」において「家庭生活」分野よりも若干評価が高い。年齢的に住宅取得や家族形成の可能性が低い大学生にとって両分野の評価が低いのは当然ともいえる。また、「住」分野に関する評価は「楽しさ」よりも「有用性」が若干高く、大学生にとっての住居学習のイメージを「楽しくはないが役に立つ」と指摘した宮崎らの先行研究と一致する。

図3は「住」分野について好き嫌いを5段階で評価したものである。他分野との相対評価では評価の低かった「住」分野であるが「好き」「やや好き」合わせて45%「嫌い」「やや嫌い」合わせて9%と、「住」分野の学習が忌避されているわけではないことが分かる。約半数が「どちらとも言えない」と回答しており、高校までの学習内容があまり印象に残っていないか、十分な時間の学習をしてこなかった可能性も考えられる。

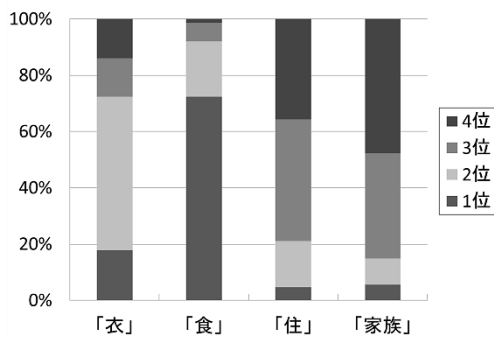


図1 家庭科各分野の「楽しさ」(n=213)

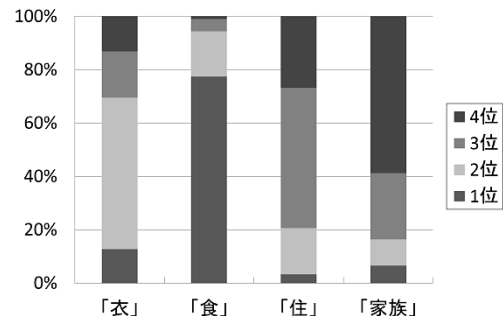


図2 家庭科各分野の「有用性」(n=213)

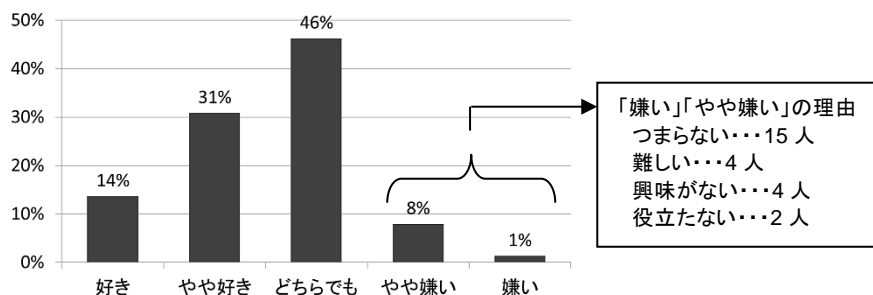


図3 家庭科「住」分野の好き嫌い (n=227)、及び嫌いな理由 (n=20, 複数回答)

(2) 大学生の「インテリア」に対する意識

図4はインテリアの好き嫌い、図5は「インテリア」に関する内容を小学校～高等学校の家庭科教育で取り扱うことへの賛否を質問した結果である。両設問とも「どちらでもない」を中立とした5段階で回答を得ている。図4では「好き」「やや好き」合わせて85%を占め、図5では「良い」「まあ良い」合わせて81%を占める。大学生のインテリアへの好感度は高く、家庭科教育で取り扱うことに肯定的であるといえる。図6はインテリアの好き嫌いと家庭科教育で取り扱うことの賛否の関係である。「インテリア」が「好き」なほど家庭科への取り入れに肯定的であり、個人的な「インテリア」に対する嗜好が家庭科学習で扱うことの良し悪しの判断に反映されているといえる。図7に取り扱うことに賛成する理由、図8に反対する理由を示す。賛成する理由は「興味があるから」「好きだから」という個人的な嗜好によるものが多く、「生活に役に立つから」「生きるのに役に立つから」といった実用性、「取り入れる必要があるから」「家庭科で教えるべきであるから」という学習の必要性を理由とするものは少ない。特に「家庭科で教えるべきであるから」の選択者は1人のみである。また、取り入れに反対する意見自体が少数であるが、その中で最も多い理由は「家庭科では他に教えるべきことがあるから」の9人である。また「嫌いだから」「興味がないから」はいなかった。これらのことから「インテリア」学習に対して多くの学生が、「興味はあるが、家庭科学習において必須の内容ではない」という認識を持っているといえる。

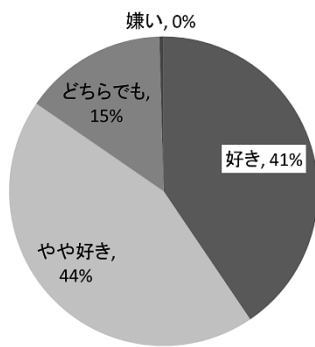


図4 「インテリア」の好き嫌い (n=227)

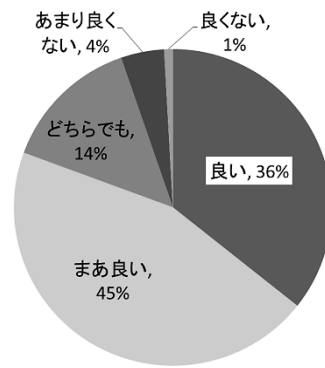


図5 「インテリア」学習の賛否 (n=227)

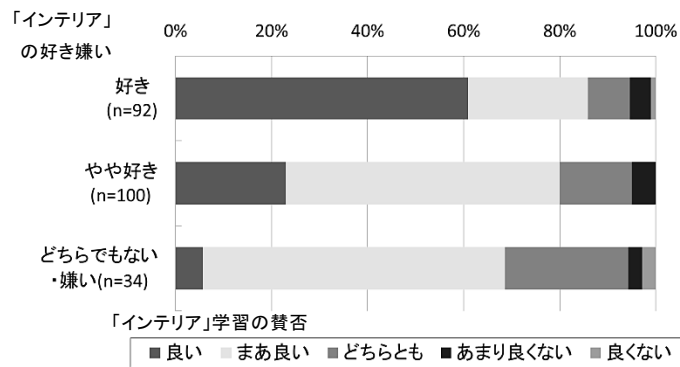


図6 「インテリア」の好き嫌い と 学習の賛否 (n=227)

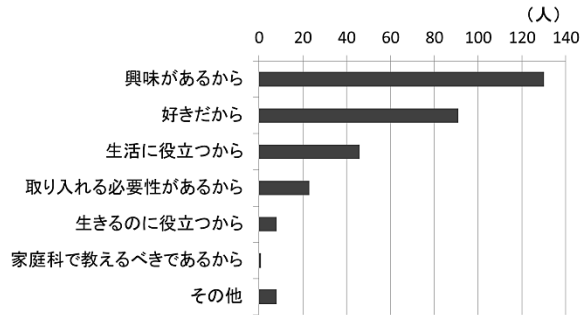


図7 「インテリア」学習 賛成の理由 (n=183, 複数回答)

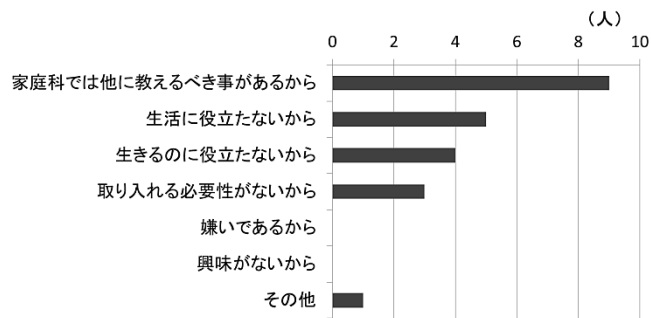


図8 「インテリア」学習 反対の理由 (n=12, 複数回答)

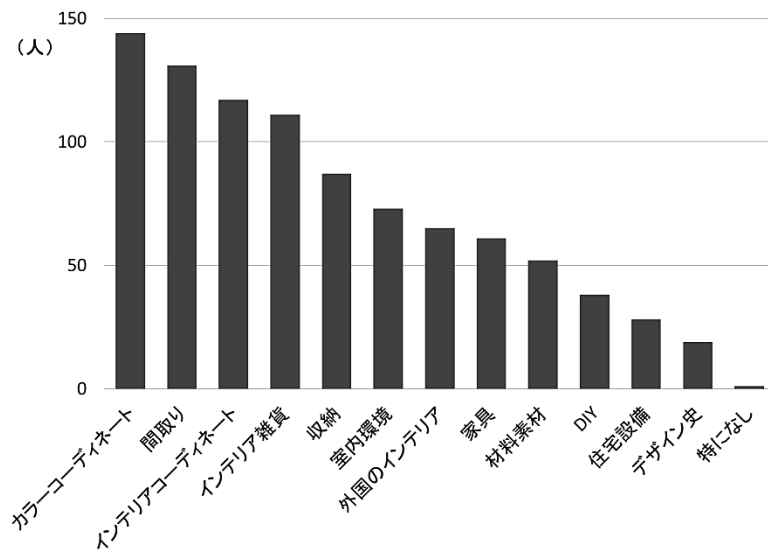


図9 学んでみたい「インテリア」学習のテーマ (n=226, 複数回答)

図9は「インテリア」学習を小学校～高等学校の家庭科で取り扱うと仮定し、その際に自分が学んでみたいことを選択（複数回答可）したものである。最多は「カラーコーディネート」で60%を超える学生が選択している。また「間取り」「インテリアコーディネート」「インテリア雑貨」は過半の学生が選択しており、興味の高いテーマと言える。これらは「間取り」を除き室内装飾に関わるテーマ

であり、自分が生活する空間を視覚的に美しくする方法に対して興味が高いといえる。逆に「インテリアのデザイン史」「住宅設備」「材料素材」等を選択した学生は少なく「インテリア」に関連する内容でも実生活に生かすにくいテーマには興味が低いといえる。また、実用的なテーマであってもDIYは選択者が少なく、技能や時間を要するものは忌避される傾向があるのかもしれない。大学生にとって興味あるテーマは、知識や技能を身につけるものでなく、実生活で手軽に生かせるものであると考えられる。

(3) 大学生の部屋作りの現状と意識

図10は部屋作りの満足度について5段階で評価させた結果である。「満足」「おおむね満足」合わせて50%を超えるが、「満足」と答えたのは全体の4%のみであり、多くの学生が完全には満足はいく部屋作りができていないと考えることができる。

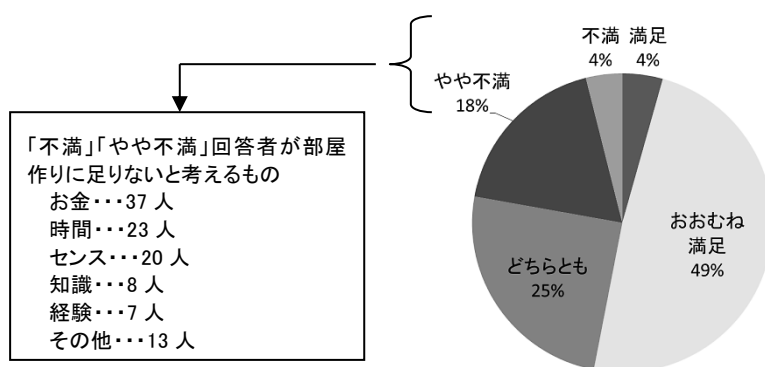


図10 自室の部屋作りの満足度 (n=229)、及び部屋作りに足りないもの (n=52, 複数回答)

また、「不満」「やや不満」の回答者に対して「自分の部屋作りに、何が不足しているのか」を聞いたところ、多くが「お金」「時間」「センス」を挙げている。また、図11は部屋作りに必要だと考えるものを選択肢の中から1位から3位まで順位をつけたものである。この設問は全員を対象にしたものであるが、ここでも「お金」と「センス」が大半を占め、次いで「時間」が挙げられている。また、図12は家庭科「住」分野の有用性順位(図2参照)と良い部屋作りに必要なものの関係を示したものである。「住」分野の有用性を低く評価するグループでは部屋作りに「センス」が必要とする割合が高くなっている。また、有用性を高く評価するグループでは「知識」の割合が若干高くなっている。図13は部屋作りのための知識やセンスを獲得にはどうすればよいかを問うたものである。「本やテレビを活用」「家族・友人を参考に」という考えが多く、「小学～高校の家庭科」に期待する数は非常に少なく選択肢の中で最少である。

これらのことは、小学校～高等学校の不十分な家庭科「住」分野の教育が、学生に知識や経験を部屋作りに生かす機会を作り出せていないために、部屋作りやインテリアコーディネートはお金やセンスが必要な敷居の高いものという認識を与えている可能性を示唆している。生活者が部屋作りやインテリアコーディネートを楽しむのに高価な家具や専門家のようなセンスは不必要で、知識と経験を生かせば自分なりの部屋作りを楽しめるはずである。家庭科教育において、そのような実践的な内容を教えていくことが重要ではないかと思われる。

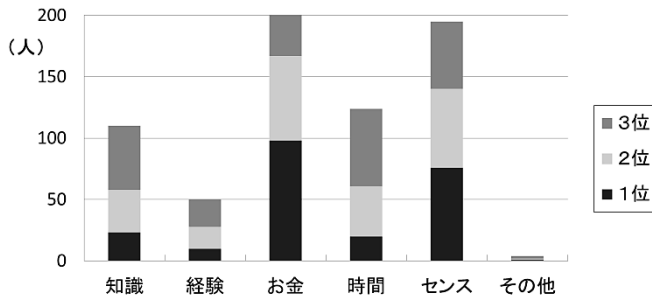


図 1 1 部屋作りに必要なもの (n=228, 上位3つに順位付け)

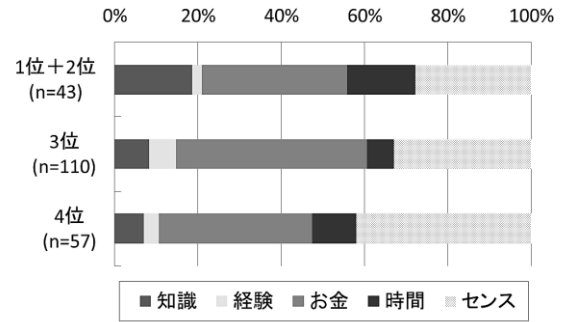


図 1 2 「住」有用性の順位別にみた部屋作りに必要なもの (n=210)

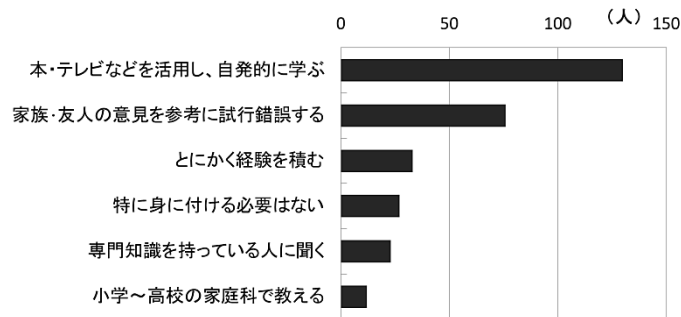


図 1 3 部屋作りの知識やセンスを獲得する方法 (n=229, 複数回答)

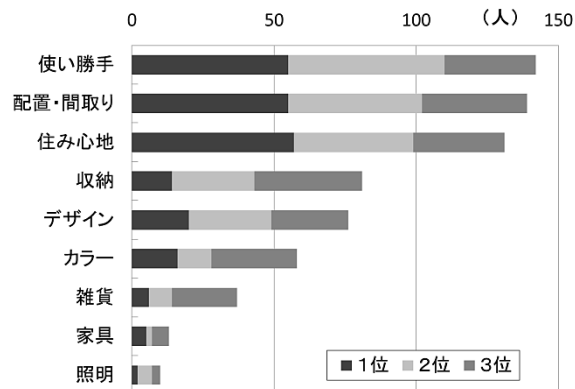


図 1 4 自室の部屋作りで重視したこと (n=229, 上位3つに順位付け)

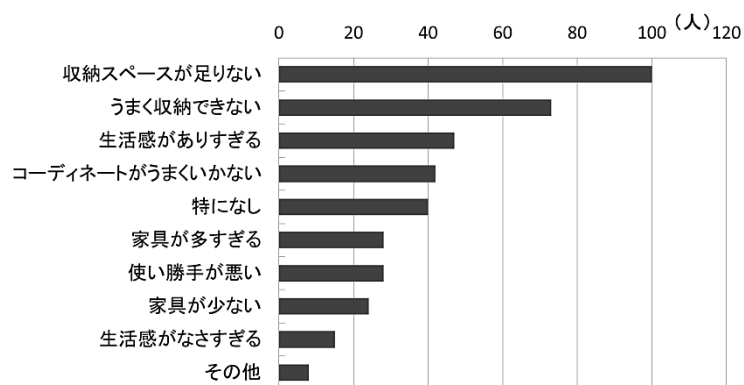


図 1 5 自室の部屋作りで困っていること
(n=228, 複数回答)

図 1 4 は自分の部屋作りの際に重視した項目を 1 位から 3 位まで順位付けしたものである。「使い勝手」「配置・間取り」「住み心地」の 3 項目が順位においても総数においても他項目よりも重視度が高く、大学生が部屋作りの際に生活空間としての基本的機能を優先させていることが分かる。「デザイン」「カラー」といった装飾的要素はその次であり、「雑貨」「家具」「照明」といった後付け可能なモノは優先度が低くなっている。また、住まいの基礎的な機能でありながらモノとしての要素も持つ「収納」は中庸な重要度となっている。一方、部屋作りに関して抱えている悩みについては、「収納スペースが足りない」「うまく収納できない」「生活感がありすぎる」といった収納と関連するものに集中している (図 1 5)。部屋作りや部屋選びの際には気付かない、あるいは着目していない問題が後日表面化してくるものと思われる。前出図 9 の学びたい「インテリア」のテーマにおいても、「収納」の評価は低くないことと併せて考えると、小学校～高等学校の家庭科教育においてインテリアとしての収納に関する学習内容を検討する価値があると思われる。それは小学校の段階で整理・整頓の生活習慣を啓蒙するのみでなく収納場所・家具・用具の選択や取り扱いに関する知識に触れ、中学校、高等学校で実践的な技術に発展させることが望ましいであろう。

4. おわりに

教員養成系学部的大学生を対象に家庭科「住」分野とインテリアに対する意識に関するアンケート調査を実施した。結果、次のことが明らかになった。

- 1) 小学校～高等学校の家庭科学習の楽しさと有用性は、両者とも「食」「衣」「住」「家族」の順に評価された。
- 2) 大学生の「インテリア」への関心は高く、家庭科において「インテリア」を学習することに対して肯定的である。一方で「インテリア」学習に興味はあるが家庭科教育において必須ではないという認識を持っている。
- 3) 大学生は部屋作りに重要なものは「お金」「センス」であると考えており、「知識」を重要視する割合は低い。また、家庭科「住」分野の有用性を低く見る学生ほど部屋作りにおいて「センス」を重視する傾向がある。小学校～高等学校の不十分な家庭科「住」分野の教育が、学生に知識や経験を部屋作りに生かす機会を作り出せていないために、部屋作りやインテリアコーディネートはお金とセンスが必要な敷居の高いものという認識を与えている可能性がある。
- 4) 収納に関する問題を抱えている学生が多く、学習内容への関心もある程度高いことから、収納場所・家具・用具の選択や取り扱いに関する学習内容を検討する価値があると思われる。

以上の結果より、家庭科教育で「インテリア」に関する知識を学ぶことの意義について次のように考えることができる。まず、大学生の「インテリア」への関心の高さや「インテリア」学習への肯定的態度は、高等学校までの家庭科教育で「インテリア」を取り上げることが、生徒の住分野への興味を喚起する可能性が高いことを示している。また、多くの大学生が問題を抱えている事項、例えば「収納」に関する技術的内容を取り入れることで、住分野の学習内容が実生活に直結する、より実践的なものになることが期待できる。一方、多くの大学生が「インテリア」学習を肯定しながらも家庭科教育に必須ではないと考える一因として、部屋作りには「お金」や「センス」という学習では獲得できないものが重要であり、「知識」を身に着けても役に立たないという誤認があると思われる。このような誤認は個性を表現する絶好の場であるはずの個人スペースですら自身でコントロールすることを放棄するという態度につながりかねず、家庭科教育が目標とする「生活の充実向上を図る態度を育てる」ための大きな障害といえる。家庭科教育で「インテリア」を取り扱うことの最も重要な意義はそのような誤認を正し、知識と技術を身に付ければ部屋作りやインテリアコーディネートが誰でも楽しめることを示すことであり、そのことによって身の回りの環境に積極的に関与するきっかけを与えることであると考えられる。知識が軽視されがちな「インテリア」だからこそ学習成果が実生活に生きることを示す格好の題材となりえるのではなかろうか。

注1)「インテリア」は広義には「建築物や部屋の内部空間」、狭義には「室内装飾や内調度品」を指すが、アンケートでは「インテリア」の定義は明示せず、回答者の持つイメージに任せている。

注2)「インテリア」学習の賛否については学習者、教育者いずれの立場で回答するかは指定していない(学習者の立場で回答した学生が多いと思われる)。

補記

本論文は既発表論文が査読により修正し掲載されるものである。

参考文献

- 1) 小沢紀美子編：豊かな住生活を考える一住居学，彰国社，pp.100-102，2002.
- 2) 奈良女子大学住生活研究室編：住生活と住教育，彰国社，pp.225-250，1993.
- 3) 尾崎沙和子：家庭科教育における住生活領域指導についての私見，女子栄養大学紀要，40，pp.49-57，2009.
- 4) 正岡さち，高嶋智恵：小学生の住意識と住教育に対する意識，島根大学教育学部紀要，教育科学・人文・社会科学・自然科学，44，pp.41-48，2010.
- 5) 宮崎陽子，岸本幸臣：大学生による高等学校家庭科における住居学習の評価と課題，日本家政学会誌，Vol.59 No.4，pp.245-253，2008.
- 6) 湯川聰子，谷崎通子，原佐緒理：教師の立場からみた住居領域内容について－高校家庭科における住教育内容の提案(第一報)，日本家政学会誌，45(5)，pp.431-435，1994.
- 7) 湯川聰子，原佐緒理：生徒の学習要求と教師側意見の比較－高校家庭科における住教育内容の提案(第二報)，日本家政学会誌，47(10)，pp.1015-1021，1996.
- 8) 立松麻衣子，湯川聰子：住居学習に関する教師と生徒の関心の所在－中学校技術・家庭科における住教育内容の検討(第1報)，日本家政学会誌，54(5)，pp.387-394，2003.
- 9) 久保加津代：高等学校家庭科教科書にみる持続可能な社会をめざす住生活力，日本建築学会計画系論文集，第75巻 第656号，pp.2423-2430，2010.
- 10) 宮崎陽子，多治見左近：住生活についての大学生の学習指向－家政・生活科学系学生の場合，日本建築学会近畿支部研究報告集，計画系(51)，pp.685-688，2011.
- 11) 中山節子，古重奈央，鎌野育代，他：住まいの学習における「空間の生命化」の教材化－小・中・高における授業実践，日本家政学会誌，62(9)，pp.611-622，2011.
- 12) 妹尾理子，大矢英世，金子京子，他：住教育のカリキュラム開発に関する実証的研究－家庭科の可能性をひらく授業づくりの理論と実践，住宅総合研究財団研究論文集(36)，pp.411-422，2009.